

手話通訳における複合語の訳出

—通訳スキルの違いにおける比較—

中野 聡子¹・菊澤 律子^{1, 2}・市田 泰弘^{1, 3}・飯泉 菜穂子^{1, 4}・

岡森 裕子⁵・金澤 貴之⁶・原 大介⁷

(¹国立民族学博物館 ²総合研究大学院大学

³国立障害者リハビリテーションセンター学院 ⁴世田谷福祉専門学校

⁵株式会社レガート ⁶群馬大学 ⁷豊田工業大学)

It has been known that one of the factors that affects the comprehension of Japanese Sign Language simultaneously interpreted from (spoken) Japanese is the way compound words are translated. However, there has been no linguistic analysis focusing on this topic. In this paper, analyzing recorded interpretation of a 13 minute academic presentation by five interpreters (meeting two different interpreting skill levels), we will show that there are linguistic factors that interfere with the comprehension of compound words. These include: i) components of compound words separated in signing space; ii) distorted signing rhythm affected by mouthing; iii) head-nodding within a compound; iv) non-occurrence of reduction and/or loss of the hand movements. We believe that showing these specific cases will contribute to the knowledge of JSL and will help interpreters improve their performance.

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

起点言語(SL)が日本語、目標言語(TL)が日本手話である同時通訳においては、複合語の訳出方法が通訳者のスキルによって異なっており、手話としての理解のしやすさに影響を与えることが経験的に知られている。日本手話も複合語を形成する過程で音韻や意味に変化を生じることがあるが(乗松他, 1998; 松岡, 2015)、実際の通訳者のデータに基づいて分析した研究は存在しない(複合語の具体的な例については1.2.2を参照のこと)。本研究では、複合語の理解のしやすさ、しにくさが実際にどのような違いに起因するものであるのかを通訳の実例のデータに基づき議論する。

まず、第2節では、複合語の通訳部分のわかりやすさについて実際に違いがみられるかどうか、またどのような違いがみられるか、通訳技術のレベルが異なる通訳者間の訳出表現について全体の傾向を分析する。その結果、複合語のみの理解に対象を限定した場合にも、通訳者の通訳技術によって有意な差がみられたことを示す。次に、第3節では、複合語の訳出のわかりやすさ、わかりにくさに影響を与える要

NAKANO Satoko et al., "The interpretation of Japanese sign language compound words: Factors affecting their comprehension," *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 17-34. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

因を調べ、問題点を整理する。わかりにくいと評価された訳出表現は、内容の理解に起因すると考えられるもの、対訳となる手話表現が日本手話の文法に正確に則って表現されていないため、わかりにくくなっているものの2つに分類できる。後者は具体的には、通訳の受け手にとって複合語がひとつの単語として認識される表現方法になっていないことが指摘できる。第4節では手話表現の文法に則っていない例の詳細について記述する。

以上の分析に基づいて、通訳スキルを一般レベルと指導者レベルに分けて、わかりにくかった表現の内訳を整理してみると、一般レベルにおいては、本稿で指摘するような問題点が出現する語彙全般にわたってみられるのに対し、指導者レベルにおけるわかりにくさでは、そのほとんどが「脱落」となっていることを示す。このことから、複合語の通訳方法の修正が、日本語から日本手話への通訳において、よりわかりやすい訳出をするための技術向上にも寄与することができる。

1.2 方法

1.2.1 分析対象データと通訳映像収録対象者

本研究で分析対象とする手話通訳の映像は、学術講義「ブルジャスキー語の連体修飾構造」[註1]について、一般レベルの通訳者3名(S1、S2、S3とする)、指導者レベルの通訳者2名(S4、S5とする)の計5名による通訳を収録したものである。一般レベルの通訳者3名は手話通訳士[註2]もしくは都道府県が認定した手話通訳者[註3]として、通訳活動を行っている。指導者レベルの通訳者2名は、手話通訳士の資格を有するのみならず、15年以上にわたって専門学校等で教育課程として手話通訳者養成にあたってきた経験をもつ。5名のプロフィールを表1に示す。

表1 手話通訳者のプロフィール

通訳者	年齢	手話学習歴	士資格	資格取得年	学術手話通訳経験
一般レベル S1	50代前半	37年	無	—	大学の講義
S2	50代前半	11年	有	H22	研究機関のセミナー等
S3	20代後半	9年	有	H27	なし
指導者レベル S4	50代前半	35年	有	H2	大学の講義, セミナー, 学会等
S5	50代前半	33年	有	H2	学会, 研究機関のセミナー等

1.2.2 分析対象単語の抽出

学術講義「ブルジャスキー語の連体修飾構造」の冒頭13分間について、起点言語(SL)が日本語、目標言語(TL)が日本手話とした同時通訳の映像およびその書き起こし原稿に出現する表現のなかから、手話で名詞+名詞の複合語として表現される単語を選んだ。ここでいう「複合語」とは、ひとつの表現がふたつ以上の単語の組み合わせに分析できる語のことを指す。具体例を(1)に示す。

- (1) 「言語系統」=「言語」+「系統」

次に、その中から実際の通訳場面で手話単語として訳出される(省略されたり、スクリーンに投影された資料の指さしや他の表現に言い換えられたりしない)可能性が高いものとして、対象を77語にしぼりこんだ。具体的な単語は、本文末の資料に下線および通し番号で示した。

なお、ここでは通訳場面における訳出表現の分析を目的としているため、起点言語である音声日本語において複合語でないが日本手話では2つ以上の要素から成り立っている語((2))、日本語で複合語であり日本手話でも複合語であるもの((3))が含まれる。音声日本語では複合語であるが日本手話では複合語でないものは対象とはならない。また、分析対象となる語の統一性をはかるため、今回は名詞のみを対象とした。

(2) 「主語」=「主」+「語」

「非定型」=「非」+「定」+「型」

(3) 「関係節」=「関係」+「節」

「接近可能範囲」=「接近」+「可能」+「範囲」

1.2.3 分析方法

分析においては、まず、対象となる77語について、わかりやすさについての評価を行った。評価者は全部で5名であり、手話通訳士の資格をもつ手話通訳者3名、手話通訳支援の研究に従事する者2名(ろう者1名、聴者1名)という内訳となっている。ろう者はネイティブ・サイナーではないが、学術手話通訳を日常的に利用する環境にあり、学術手話通訳評価の経験も豊富である。ろう者はすべての通訳映像の評価に入っている。その他の4名は部分的に評価に加わり、どの通訳映像ものべ2名が評価を行う形となっている。対象となる単語ひとつひとつについて、①「形態と意味の両方がわかりやすい訳出」(以下、「わかりやすい訳出」とする)であるか、②「形態もしくは意味のいずれか、もしくはその両方がわかりにくい訳出」(以下、「わかりにくい訳出」とする)であるかについての評価を行った。なお、訳出がない場合には「訳出なし」とした。他の表現への言い換えやスクリーン上に投影された資料への指さしなどを用いた例がみられた場合には、分析対象から除外した。

各通訳者による77語の表現について、手話表現による表出がみられたものについては、以下の点に注目してその構造を記述した。

手話表現の逐次訳

指文字の表現の場合には、その文字が示す音

脱落している要素

うなずき

ポーズ

手の動きの反復回数(各語彙の構成要素としての反復は除く)

空間の位置の移動(移動がみられる場合のみ)

表現された各要素の(手話の)音節構造

弱化、消失などの状況

分析にあたっては、マックスプランク心理言語学研究所が開発したアノテーションソフト、ELAN (EUDICO Linguistic Annotator) を利用した。

2. 訳出の状態にみられる全体的傾向

まず、1.2.2.で述べた各分析対象単語を評価者のべ2名(ろう者1名、聴者1名)が分析した結果について、評価のばらつきや度合いをみるため、カッパ係数を求めた。その結果、 $\kappa = .927$ という高い一致率が得られ、おおむね一貫した結果であることが確認できた。

次に、5名の通訳者の訳出表現について一般レベル群と指導者レベル群の間でどのようにわかりやすさが異なっているのかについて分析を行った。通訳者5名が訳出した単語の評価のまとめを表2に示す。一般レベル群と指導者レベル群の訳出評価の回数について、 χ^2 検定を行ったところ、有意差が認められた($\chi^2(2, 5) = 89.713, p < .01$)。残差分析の結果、一般レベル群は「わかりやすい訳出」が有意に少なく、「わかりにくい訳出」と「訳出なし」が有意に多いことが認められた($p < .01$)。

表2 各通訳者における訳出の状態

通訳者		わかりやすい訳出	わかりにくい訳出	訳出なし
一般レベル群	S1	25	35	12
	S2	30	22	22
	S3	9	20	43
指導者レベル群	S4	57	6	14
	S5	62	3	8

(単位は「回」)

一般レベルの3名と指導者レベル群の2名では「わかりやすい訳出」と「わかりにくい訳出」もしくは「訳出なし」の生起数が対照的である。一般レベル群は、訳出されたとしても「わかりにくい訳出」になっているものが多く、加えて「訳出なし」、すなわち訳抜けも多いことがわかる。これは、77語にしばった結果ではあるが、ここで分析対象とした単語は本講義内容の理解においてキーワードとなるものが多いことから、全体的な通訳の印象としても一般レベル群と指導者レベル群でのわかりやすさの差につながるものと考えられる。

3. 複合語の訳出のわかりやすさ／わかりにくさに影響を与える要因

手話表現による表出の構造の記述から、わかりにくいと評価された訳出表現には(4)aから(4)gに示すような特徴が含まれていることがわかった。

- (4) a. 脱落: 複合語の構成要素の一部が表出されていない
- b. 不適切な言い換え: 当該複合語の意味の等価性が担保されていない
- c. 表現の不統一: 同一の複合語の訳出表現がそのつど異なる
- d. 空間位置の移動: ひとつの複合語の表出において手話空間内で表出位置が移動する

- e. リズム: 音声の発話リズムに連動して手の動きが反復される
- f. うなずき: 手話の非手指標識(NMM: Non Manual Markers)としての本来の機能とは異なるうなずきが挿入される
- g. 手の動きの弱化・消失の非生起: 複合語の構成要素同士が結合したときに生じるべき手の動きの弱化・消失がみられない

これらのうち、「脱落」(4)a、「不適切な言い換え」(4)b、「表現の不統一」(4)cの3つは、通訳者自身の内容の理解に直接的な影響を受けて、意味が正確に変換されなかったためわかりにくくなっているもの、(4)d「空間位置の移動」、(4)e「リズム」(4)e、「うなずき」(4)f、「手の動きの弱化・消失の非生起」(4)gは訳出された表現が日本手話の文法に正確に則って表現されていないためわかりにくくなっているものと考えられる。

これらのうち、「脱落」と「不適切な言い換え」の生起状況は表3のとおりである。なお、同一単語内での出現については、単語内で生じた回数に関係なく1回として数えた。たとえば、同じ単語内で脱落が2回見られた場合(2つの要素が脱落した場合など)でも、生起状況は1回として扱っている。

表3 「脱落」と「不適切な言い換え」の生起状況

通訳者		脱落	不適切な言い換え
一般レベル群	S1	22	11
	S2	9	12
	S3	9	5
指導者レベル群	S4	6	0
	S5	3	0

(単位は「回」)

以下にそれぞれの具体例をあげる。ここでは、コロン(:)の左側に起点となる日本語の単語を、右側に訳出された手話表現を示す。日本語の単語の最初に付けられた数字^[23]などは、本文末につけた講義の書き起こし文における出現箇所に対応している。手話表現の構成要素については、以下のように示す。まず、表出された要素については、その意味に近い日本語を{}内に左から右に、表出順に示す。指文字で表現された要素については{}はつけず、表現された音価をカタカナで表記した。脱落した要素は、()内に↓という記号に続けて脱落した要素に該当する日本語を示す。また、該当の訳出を行った通訳者を[]内に記す。

(5)と(6)は、「脱落」(4)aの例である。(5)の「連体修飾構造」の場合には、まず、「連体」に該当する要素は表現されず、「修飾」、「構造」に該当する手話表現がこの順で表出されたことを示している。また、(6)の「斜格項」の場合には、「斜め」に該当する要素に続いて、指文字で「カク」と表現され、「項」に該当する要素は表現されなかった。

(5) ^[23]連体修飾構造 : (↓連体) {修飾} {構造} [S2]

(6) ^[42]斜格項 : {斜め} カク (↓項) [S5]

なお、手話表現としては表出されていなくても、起点となる日本語の単語を発音するときの口形(マウジング、mouthing)が用いられる例は、脱落として分類していない。これに該当するものとしては、たとえば、(7)のように、「斜め」に該当する手話表現に続いて指文字で「カク」と表現される間に、「斜格項」という発音の口形を出すという訳出がみられた。ここでは、マウジングの口形による表現を「M」に続けて表記し、手話表現の表出と共起する場合には、手話表現の記述と並列する形で示す。アンダーラインは、マウジングとの共起部分を示す。

(7) ^[42]斜格項 : {斜め} カク [S4]
M: シャカクコウ

(8)から(10)に、「不適切な言い換え」(4)bの例をあげる。

(8) ^[3]言語系統: {歴史} [S2]
(9) ^[37]主語 : {守る} ゴ [S3]
(10) ^[54]能格 : {脳} カク [S2]

(8)は、訳出された表現が元の語彙の学術用語としての意味を示しておらず、意味の等価性が確保できなかった例である。また、(9)と(10)は、SL である日本語の音韻の影響を受けていると考えられる例である。(9)では「主(シュ)」、(10)では「能(ノウ)」の部分が、それぞれ日本語の音が同じ「守(シュ)」、「脳(ノウ)」で表現されている。音声日本語の話者ならではの通訳ミスと言えるが、通訳の受け手である先天性ろう者にとっては、音韻的な類似性から元の正しい意味を想像することは困難であることを認識する必要がある(菊池 2006; 中野他 2008; 中野他 2011)。また、ここでの「守」や「脳」などの手話表現は、漢字の1文字1文字のように単体で意味情報を持つため、{主}と{守る}では全く異なる意味となってしまうことから、通訳の受け手に混乱をきたす。

(4)cの「表現の不統一」については、講義の中で複数回にわたって出現した複合語のうち、「ブルシャスキー語」、「関係化構造」、「関係節」、「主語」、「比較基準項」、「非定型修飾構造」、「連体修飾構造」の7語について、省略されない可能性の高い5箇所を選び、表現の一貫性を分析した。同一の表現で表出された回数(複数の同一表現がある場合は多い方の表現)の平均は、S1: 1.7回、S2: 1.2回、S3: 1.0回、S4: 2.7回、S5: 2.9回であり、一般レベル群と指導者レベル群の間に差がみられた。一般レベル群の通訳者では、そのときによって脱落する部分が異なる、構成要素の表現が異なるなど一貫しておらず、通訳の受け手にとって同一語と認識されにくい訳出となっていた。これに対し、指導者レベル群では、短い複合語は一貫して同じ表現方法を取り、長い複合語は回を重ねるにつれ、一部が脱落する傾向がみられた。これは、ここでは「脱落」として分類したが通訳者による意図的な省略とみるべきであると考えられる。

次に、対訳となる手話表現が日本手話の文法に正確に則って表現されていないためわかりにくくなっていると思われる「空間位置の移動」(4)d、「リズム」(4)e、「うなずき」(4)f、「手の動きの弱化・消失の非生起」(4)gの生起数について、表4に示す。

表4 日本手話の文法的要素に関連するわかりにくさの要因の生起数

通訳者		空間位置の移動	リズム	うなずき	弱化・消失の 非生起
一般レベル群	S1	3	17	24	17
	S2	0	3	10	10
	S3	0	2	12	3
指導者レベル群	S4	0	0	1	0
	S5	0	0	1	0

(単位は「回」)

一般レベル群では、リズム、うなずき、手の動きの弱化・消失の非生起、いずれについても多く出現している。S1 の 1 名のみであるが、空間位置の移動についても出現が観察された。これに対し、指導者レベル群は日本手話の文法的要素に起因するわかりにくい表現については、うなずきの各 1 回以外は皆無である。第 4 節で、それぞれについて具体例を示す。

4. 日本手話の文法的要素に起因するわかりにくい訳出の具体例

4.1 空間位置の移動

日本手話の表現には、大きく分けて、話者の身体部分への接触を伴う表現と、そうでない表現がある。後者は身体からは離れた手話空間で表現されるが、この空間の使い方は日本手話文法の一部でもある。手話言語の複合語が 1 つの単語として理解されるためには、身体部分への接触を伴う構成要素以外は、1 つの決まった空間位置で表出されなければならない。たとえば、「連体修飾構造」は、{連}{体}{修飾}{構造}のように 4 つの構成要素からなると分析できるが、これらが合わせて 1 つの単語として認識されるためには、図 1 に示したように、すべてが特定の空間位置で表現されなくてはならない。ところが、一般レベル群の通訳者による表現の中には、図 2 に示すように、同じ複合語を表現するときに一部の構成要素が異なる空間位置で表現される例がみられた[註 4]。この場合、別の位置で表現される構成要素は、それぞれの独立した別の単語と認識されてしまい、理解の妨げになる。同一複合語内で空間位置の移動がみられた語には、他に、「使用可能範囲」、「関係化構造」があった。

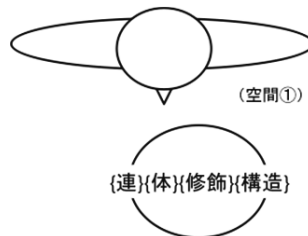


図1 複合語がひとつの単語として認識される空間の使い方

落しているが、日本語単語の発音におけるフット数はそのまま維持されている。

- (13) ^[26]言語学 : {言語₁} {言語₂} {言語₂} {言語₂} (↓学) [S1]
 M: ゲン ゴ ガ ク

③の例としては、(14)があげられる。まず、「語順」を「言葉の順番」と音声で言い換えてマウジングをし、「こと | ばの | じゅん | ばん」という音声の発話のリズムに合わせて、{語}を意味する手話表現を左から右へ手話空間内を移動させながら4回繰り返している。このような手話空間内での移動には「(語が)並んでいる」という意味があり、通訳者は、語を並べることで「語順」を表そうとしたと考えられる。

- (14) ^[47]語順 : {語} {語} {語} {語} (全体にわたって左から右へ移動を伴う) [S1]
 M: コト バノ ジュン バン

4.3 うなずきの挿入

日本手話においては語・句のまとまりや修飾、並列関係が、おもに頭の動きと眉の位置による非手指標識(NMM: Non Manual Markers)によって表される(木村・市田 2014; 岡・赤堀 2011)。名詞Aと名詞Bの間にうなずきが入った場合には、「AとB」を意味する並列関係が表現される。したがって、全体で1つの意味を表す複合語が手話表現として正しく表出されるときには、構成要素間にうなずきが入ることはない。ここでは、「言語系統」を示す表現を例にとり、(15)に「言語系統」が全体で1つの単語として認識される訳出例、(16)に「言語と系統」と理解されてしまう訳出例を示す。「■」はうなずきが入る位置を示す。

- (15) ^[3]言語系統: {言語} {系統} [S5]
 (16) ^[3]言語系統: {言語} ■ {系統} [S1]

ここで、うなずきが、言いよどみであるポーズ、すなわち、手の動きの停滞とは異なることに注意する必要がある。ポーズの場合には、語の切れ目であるとは認識されないからである。指導者レベル群による訳出では、構成要素と構成要素の間に言いよどみであるポーズが入ることはあっても、うなずきが入ることはほぼ皆無であったのに対し、一般レベル群による訳出には、ポーズである可能性がある場合にも頭部の前傾がみられることがあり(表3)、理解の妨げの主要な要因の1つになっていることが見てとれる。

うなずきが理解の妨げになっている例を分析すると、以下の2つのパターンが観察された。

- ① 構成要素間にうなずきが入り、構成要素の結合を妨げている例
- ② 脱落の埋め合わせとしてうなずきが入る例

以下、それぞれについて具体例をあげて説明する。

まず、①の構成要素間にうなずきが入り、構成要素の結合を妨げている例を(17)と(18)にあげる。いずれも指文字による日本語借用と手話単語の組み合わせからなる表現であるが、それぞれ構成要素と構成要素のあいだにうなずきが入っており、(17)は「格と配列」、(18)「動詞と句」と解釈される。

- (17) ^[7]格配列 : カク ■ {配列} [S1]
 (18) ^[33]動詞句 : {動詞} ■ ク [S1]

うなずきであるか言いよどみであるかの解釈は、複合語内のどの位置に頭部の前傾がみられるかによっても異なる。(19)は、「連体修飾構造」の訳出全体にわたって、言いよどみ、もしくはうなずき(■_{1~3})が入った例である。これらのうち、■₁は、言いよどみとも、レントアイとシュウシヨクを分けるうなずきのいずれにも解釈できる。■₂は、前後の要素が独立した要素として解釈できる可能性がないため(シュウとシヨクでは意味をなさない)、単に言いよどみと理解される。■₃は、うなずきという解釈が一般的である。

- (19) ^[8]連体修飾構造 : レンタイ ■₁ シュウ ■₂ シヨク ■₃ {構造} [S3]

指文字は日本語の50音表記を手指で表すものであり、長い綴りになると表出によどみを生じやすい。指文字での表現は日本語からの借用であることが多く、表出において日本語のモーラに合わせてポーズが入ることはよくみられる現象である。しかし、手の動きの停滞が起こったときに、頭部の前傾が伴うと、うなずきであるという解釈となり、前後の要素が別の語として解釈され、意味が正確に伝わらなくなる。

次に、②の複合語の構成要素の脱落箇所にうなずきを挿入することで、脱落の「うめあわせ」をするかのようにみられる表現の例をあげる。

- (20) ^[8]連体修飾構造 : {連} {体} ■ (↓修飾) {構造} [S2]
 (21) ^[7]比較基準項 : {比較} {基準} ■ (↓項) [S1]

(20)は手話表現では「修飾」にあたる要素が脱落しているが、本来であればその要素が入る部分にうなずきが入っている。その結果、全体としては「連体と構造」という意味に解釈される。(21)は「項」にあたる最後の構成要素が脱落し、その位置にうなずきが出現している。ここにうなずきが入ることで、接続詞が入ったような解釈も可能になり、いずれにしても意味が正確に伝わらない訳出となってしまっている。

4.4 手の動きの弱化および消失の非生起

言語において複数の要素が結合して語を形成するとき、一般的に語音変化や弱化(reduction)・消失(loss)などを伴うことはよく知られている。日本手話においても、音韻的要素(手型、位置、動き)に同様の現象がみられることが、福島他(1998)、乗松他(1998)によって報告されている。本研究では乗松他(1998)に従い、分析対象単語で訳出のあったものについて、各構成要素を(22)a~(22)dの4つのタイプに分け、「わかりやすい訳出」と判定された表現と「わかりにくい訳出」と判定された表現において、手の動きの弱化および消失の生起状況を分析した。その結果、前者では語音変化や弱化が規則通りみられるのに対し、後者ではみられないことも多かった(表3)。なお、(22)dのAA'タイプに分類される構成要素は今回の分析対象用語にはみられなかった。

- (22) a. A ……動きが1つだけの構成要素(例:{体})
 b. AA ……同じ動きが2回繰り返される構成要素(例:{関係})
 c. AB ……異なる動きが連続する構成要素(例:{博物館})
 d. AA' ……同じ動き・手型が異なる手で繰り返される語(例:{竹})

まず「わかりやすい訳出」とされた手話表現での弱化・消失の生起を「語順」という表現を例にとりて示す。

「語順」を表す手話表現の構成要素である{語}、{順}は、いずれも同じ動きが2回繰り返されるAAタイプである。したがって、「語順」という複合語は「AA+AA」という結合であるといえる。日本手話におけるAA+AAの結合では、語の構造(:の左側)と表現型(:の右側)との間に(23)で示したような関係がみられることが報告されている(乗松他, 1998)。なお、「/」は構成要素の境界を示す。また、太文字は弱化がもつとも起こりにくい動き、「-」は常に消失、小文字は弱化、「()」は動きが消失する機会が多いことを表す。

- (23) AA+AA : A-/A(a)

「語順」の訳出のうち、わかりやすいと判定された例は、(24)のように表現されていた。2つの構成要素のうち、最初の要素は、動きの数に2回から1回に減少しており、(23)の原則に従っている。2つめの要素は、動きが1回になり代償延長が起こっていると解釈できる。このような音変化の結果、(24)は、「語順」というひとつの単語として自然な表出となっている。

- (24) ^[47]語順 : {語} {順} AA+AA → A/A [S4]

次に、「国立民族学博物館」を例にとりて、(25)に「わかりやすい訳出」、(26)に「わかりにくい訳出」と判定された表現の手の動きの弱化の生起状況を記す。どちらも{国立}{民族学}{博物館}の3つの構成要素で表現されており、いずれの構成要素もABタイプの音節構造である。

- (25) ^[1]{国立} {民族学} {博物館} : AB+AB+AB → Ab/aB/aB [S5]

- (26) ^[1]{国立} {民族学} {博物館} : AB+AB+AB → AB/AB/aB [S2]

3つの構成要素からなる複合語の弱化などのパターンについては詳しい分析が必要ではあるが、(25)については、1つめの要素の後半、2つめの要素の前半、3つめの要素の前半の弱化が起こることにより、全体が無理なく1つの単語として解釈されると考えられる。一方、(26)は、1つめと2つめの構成要素に弱化がみられず、それぞれ独立した語のように解釈され、意味がわかりにくくなったと考えられる。

5. まとめ

本研究では、日本手話の複合語に焦点をあて、一般レベル群の通訳者と、指導者レベル群の通訳者による日本語から日本手話への通訳映像の実例を比較した。対象となる複合語について、わかりやすい訳出とわかりにくい訳出の実例を検討することで、訳出のわかりやすさには、通訳者の内容の理解度による要因と、文法的な要素の正確な使用に関する要因があることを、実例をあげて示した。特に後者については、「空間の移動」「リズム」「うなずき」「手の動きの弱化・消失の非生起」などが関与していることを指摘した。今回示したわかりやすさに関する個々の具体的な要因を理論的に把握し、実践に結びつけることで、手話通訳者が技術向上を目指す一助となると考えられる。ただし、現実の通訳場面においては、これらのうち複数の要因が関与することが多く、さらに、うなずきが入る場合には、弱化は起きにくいなど、異なる要因どうしが音韻的に影響を与え合うケースも考えられる。このような点については、手話の音論や音韻論等を踏まえつつ、さらに詳しく研究を進める必要がある。

.....

【謝辞】

本研究にご協力いただいた国立民族学博物館学術手話通訳研究事業の通訳協力者の皆様、通訳映像のデータ整理にご協力いただいた国立民族学博物館事務補佐員の隅田伸子さん、アルバイトの川鶴和子さん、小島直子さんに心からの謝意を表す。また、国立民族学博物館の吉岡乾先生には、講義資料の収録でお世話になった。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究15K13252)の補助を受けた。

.....

【著者紹介】

中野聡子(NAKANO Satoko)国立民族学博物館先端人類科学研究部プロジェクト研究員、専門領域は聴覚障害学、聴覚障害児・者支援。著書に『大人の手話・子どもの手話—手話にみる空間認知の発達』2002 明石書店 など。

菊澤律子(KIKUSAWA Ritsuko)国立民族学博物館先端人類科学研究部・総合研究大学院大学人文科学研究科准教授、専門領域は言語学(記述言語学、歴史言語学)およびオセアニア先史研究。論文にThe Austronesian Language Family (*The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, 2015)、「ことばから探る人の移動」(『人類の移動誌』2013)など。

市田泰弘(ICHIDA Yasuhiro)国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官、国立民族学博物館特別客員教授、専門領域は手話言語学および翻訳通訳教育。共著書に『改訂新版 はじめての手話』2014 生活書院 など。

飯泉菜穂子(IIZUMI Naoko)学校法人大東学園世田谷福祉専門学校手話通訳学科主任・手話通訳専攻科担任、国立民族学博物館特別客員教授。手話通訳士。

岡森裕子(OKAMORI Yuko)株式会社レガート代表、通訳コーディネーター。

金澤貴之(KANAZAWA Takayuki) 群馬大学教育学部教授、専門領域は障害児教育学。著書に『手話の社会学—教育現場への手話導入における当事者性を巡って—』2013 生活書院 など。

原大介(HARA Daisuke) 豊田工業大学工学部外国語研究室教授。シカゴ大学でPh.D.取得。専門は手話言語学(手話音韻論・形態論)。共著書に『言語学の領域 II (シリーズ朝倉「言語と可能性」2)』2009 朝倉書店 など。

【註】

1. 本講義は、ブルジャスキー語の記述研究を専門とする言語学の専門家、吉岡乾氏(国立民族学博物館)が研究会での報告として準備された内容を、国立民族学博物館学術手話通訳研究事業のために収録させていただいたものである。書き起こし文(分析の対象とした冒頭 13 分間の全文)については、文末資料参照。
2. 厚生労働省令第 96 号「手話通訳を行う者の知識及び技能の審査・証明事業の認定に関する省令」平成 21 年 3 月 31 日)
3. 全国手話研修センターが実施する「手話通訳者全国統一試験」の合格が条件となっている。
4. 図 2 では、語彙的には「連体修飾構造」を(動詞)(名詞)(修飾)(構造)と言い換えて通訳している。格関係をあらわす表現は表出されていないが文脈から想像すると「動詞が名詞を修飾する構造」といったところか。
5. この反復運動は、日本手話文法の一部である動詞の語彙的アスペクト(点性、反復性、持続性)(市田、2005)とは異なるものである。

【参考文献】

- 福島和子・関根智美・赤堀仁美・泉宣秀・福田友美子・木村晴美・市田泰弘・春日井中・鈴木和子・中嶋直子・近藤和歌子(1998)「聾者間の対話の日本手話で見られる音韻表現の変形」『日本手話学会第 24 回大会予稿集』(pp. 34-37)
- 半沢千絵美・アイオワ大学(2011)「日本語学習者の聞き手としての行動—相づちとうなずきの使用と認識の結果から—」[Online] <http://www.ca.jle.info/wp-content/uploads/2012/06/CAJLE-Vol-12.159-179.pdf> (2015 年 7 月 31 日)
- 市田泰弘 (2005) 「手話の言語学(5) 時間・空間と手の運動—日本手話の文法(1)「アスペクト」ほか」『月刊言語』第 34 巻第 5 号: 92-99. 大修館書店
- 菊池真里 (2006) 「音声認識を活用した聴覚障害学生の情報保障のあり方に関する研究—誤認識の推測に注目して—」『群馬大学大学院教育学研究科修士論文』群馬大学
- 木村晴美・市田泰弘 (2014) 『改訂新版 はじめての手話 初歩からやさしく学べる手話の本』生活書院
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ 手話言語学の基礎』くろしお出版
- 中野聡子・金澤貴之・牧原功・黒木速人・上田一貴・井野秀一・伊福部達 (2008) 「音声認識技術を利用した字幕呈示システムの活用に関する研究—聴覚障害者のニーズに即した呈示方法—」『メディア教育研究』第 5 巻第 2 号: 63-72.

- 中野聡子・山田敏幸・上原景子・金澤貴之・レイモンド B. フーゲンブーム・上田一貴・伊福部達 (2011)
「日本人聴覚障害者による視覚提示英単語の語彙情報アクセス誤変換を含む英語音声認識字幕の
改善に向けた実験的検討」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第60巻: 135-143.
- 乗松秀暢・市田泰弘・泉宣秀・赤堀仁美・福島和子・関根智美・福田友美子・木村晴美・鈴木和子・近藤和
歌子・春日井中・中嶋直子 (1998) 「日本手話の複合語形成における動きの弱化と消失」『日本手話
学会第24回大会予稿集』42-45.
- 岡典栄・赤堀仁美 (2011) 『日本手話のしくみ』(第4版) 大修館書店
- 佐々木仁子・久保田正人 (2002) 「日本手話と日本語」『言語文化論叢』第10巻:13-24.

資料

「ブルシャスキー語の動詞の連体修飾構造」

よろしくお願ひします。^[1]国立民族学博物館の吉岡です。きょうは「ブルシャスキー語の動詞の連体修飾構造」というテーマで発表させていただきます。

まず「はじめに」。^[2]ブルシャスキー語とは、どういふ言語かといふのを簡単に説明します。

ブルシャスキー語は、パキスタン北部で話されている言語で、^[3]言語系統が分からない言葉です。^[4]主要部後置型、SV/AOV 型、^[5]主語、^[6]目的語、動詞の言語で、形態的には膠着的な言語です。^[7]格配列としては能格言語になっています。

^[8]連体修飾構造が^[9]ブルシャスキー語には二つあります。といふのを今回の発表では中心に扱っていくものです。その二つといふのは、^[10]非定型の^[11]修飾構造、^[12]分詞や不定詞を使うものと、^[13]定型の構造があります。その二つの構造に機能的な広さに少しだけ差があるといふことを、今回の発表では言ひます。それと使われ方にも少しだけ偏差があるといふことを言ひます。

この発表の構成です。まず^[14]連体修飾構造といふのはどういふものかといふのを^[15]類型論をざっと説明します。それから^[16]名詞句の^[17]接近可能性階層といふものを説明し、^[18]ブルシャスキー語の連体修飾構造をその後に見ていきます。

ブルシャスキー語の連体修飾構造には、先ほど言つた通り、2種類の連体修飾構造がある。それぞれ^[19]使用可能範囲が違うといふことを示していきます。その後、実際にどう使われ方が異なっているかといふ話をし、どうしてそのように異なるのかといふ話もしていきます。最後に^[20]ブルシャスキー語の^[21]連体修飾構造が^[22]ウルドゥー語にちよつと似ているといふ話をして終わります。

「連体修飾構造の類型論」。^[23]連体修飾構造とは何かといふ話ですが、ざっくり言つと、修飾句、^[24]動詞類を内包している修飾句が^[25]名詞類の被修飾語を修飾するといふ構造全体を「連体修飾構造」と言ひます。

^[26]言語学をかじっている人はみんな思ふと思ふのですが、^[27]関係節とはどう違うのかといふことですが、連体修飾構造のほうが、関係節よりももう少し意味範囲が広いと言ひます。どういふことかといふと、^[28]関係節は^[29]主節の中に^[30]被修飾語が復元できなければつくれるのですが、連体修飾構造はそうとは限らないといふ意味で、少し意味範囲が広がっています。

そもそも関係節とか^[31]修飾句といふ用語を使つているのですけれど、節と句の線引きができるのかといふところもちよつとあれなので、「関係節」といふ表現は使わず、修飾句といふものを含んだ修飾構造といふことで話を進めていきます。

Comrie(1981)といふ先行研究で^[32]関係節の類型が述べられています。それには四つの類型があつて、Gap strategy、Relative-pronoun strategy、Pronoun-retention strategy、Non-reduction strategy といふ四つが挙げられています。

これはどう違うのかと言ひますと、まず名詞、動詞を含んだ句、例えば「パンを食べた」といふ^[33]動詞句があつたとして、その「パン」を修飾したい時にどうするか、といふ時に、「食べた、パン」みたいに、もともと

「パン」があったところが何もなくなるのが Gap strategy です。そこに関係詞が出てきて、「関係詞、食べた、パン」となったら Relative-pronoun strategy です。^[34]代名詞が出てきて「それを、食べた、パン」となったら Pronoun-retention strategy。最後に「パン」は元の場所にも残ったまま「パンを食べた、そのパン」みたいな言い方をすると、Non-reduction strategy というふうになります。

これは関係節の^[35]類型なのですけれど、このまま連体修飾構造にも応用できそうなので使っていきます。

次に名詞句の接近可能性階層というものの話をします。「接近可能性階層」と訳されているものは、Accessibility hierarchy というもので、Keenan and Comrie(1977)あたりが最初に言っているものです。

これは、こういう^[36]ハイアラーキーなのです。^[37]主語が一番左で直接目的語>間接目的語>斜格項>属格項>比較基準項というのがこういう順番で並んでいて、何を表しているのかと言いますと、ある関係構造、関係節をつくる構造が、どこまでを底の^[38]名詞にできるかという階層です。

例えば、^[39]直接目的語を修飾することのできる^[40]関係節の構造を持っている言語だったら、その関係節の構造は、^[41]主語も必ず修飾することができます。逆に^[42]斜格項を修飾することはできなければ、^[43]属格項や^[44]比較基準項を修飾することもできません。

これもこのまま使えそうなので、連体修飾構造に今回の話に応用していきます。

では、ブルシャスキー語の連体修飾構造を見ていきます。もう何度も言いましたが、ブルシャスキー語の連体修飾構造は2種類あります。一つが^[45]非定型修飾構造、もう一つが^[46]関係化構造です。

この文をサンプルにその二つの構造を説明していきます。まず文を読みませう。

sabuúr dzáa áie qhát girmínuno. 「きのう私の娘が手紙を書いた」

^[47]語順は日本語と一緒になので、「きのう、私の、娘が、手紙を、書いた」という文です。

これが^[48]非定型修飾構造ではどうなるかという話です。まずこの構造がどういう形をしているかというところ、Gap strategy を使っています。もともとあった名詞句が後ろに出て、その名詞があったところがゼロになる。動詞の形が語幹に-m あるいは-as というものがついた形になるのですけれど、^[49]動詞語幹に-m がついた形が^[50]完了分詞、-as がついた形は^[51]不定詞になります。

完了分詞の例では、例文4番がそうなのですが、

sabuúr dzáa áie girmínun ité qhát. あるいは、sabuúr dzáa áimo girmínun ité qhát.

「きのう、私の娘が書いたその手紙」あるいは、「きのう、私の娘の書いたその手紙」

というふうになっています。

もともと「手紙」があったところはゼロになっていて、修飾される手紙が後ろに来ています。この場合は^[52]属格主語ができます。「私の娘の書いた手紙」という言い方ができます。

次に不定詞の例です。

dzáa áie girminás ité qhát. あるいは、dzáa áimo girminás ité qhát.

「私の娘が書いている、書くその手紙」、「私の娘の書いている、書く手紙」

これもやっぱりゼロになっていて、^[53]主語は属格も^[54]能格も可能です。これがブルシヤスキー語の^[55]非定型修飾構造です。

次に^[56]関係化構造です。これはもともと名詞があったところに関係詞が残ります。^[57]動詞の定型、その後^[58]接続詞のkéというのが入ったり入らなかつたりして、demonstrative だから^[59]指示詞で名詞というふうになります。なので、Relative-pronoun strategy になっています。

^[60]ブルシヤスキー語では^[61]関係詞は^[62]疑問詞なので、このようになります。

sabuúr dzáa áie bésan girmínuno ké ité qhát.

「きのう私の娘が何を書いたであるところのその手紙」

という言い方をします。^[63]関係代名詞は疑問詞の「何」が使われています。

二つの^[64]連体修飾構造の接近可能範囲はどうなっているかということですが、これは聞き出し調査、^[65]elicitation 調査で検証しました。詳しくはハンドアウトに書いてあるのですが、ウルドゥー語を使って2013年にやりました。

それぞれの構造の接近可能範囲ですが、^[66]非定型修飾構造は、^[67]主語から属格までがOKで、^[68]比較基準項は修飾できない。^[69]関係化構造は全部できるということになりました。

これを具体的に内容を見ていきますと、属格項までは共通していて、^[70]比較基準項だけに二つの構造の間で差がある。属格項の例では、

iné sise kamerá qharáap maním. 「その人のカメラ、悪くなった」

という例を元にしてつくってみると、非定型修飾構造では、(8)のb。

kamerá qharáap manúum iné sís. 「カメラが悪くなったその人」

(8)のcでは、

ámíne kamerá qharáap maními ké iné sís

「誰のカメラが悪くなったである、その人」、「カメラが壊れたその人」

と、どちらもできます。

比較基準項ではどうなるかですが、「その犬よりも猫が速く走っている」という例。

isé hùktsum búç jár gáarcibi. 「その犬から猫、前を走っている」

という例を元につくってみると、非定型修飾構造ではできません。(9)の b。

búç jár gáartsas isé húk. 「猫が前を走っているその犬」

という言い方はできず、(9)の c のように、

ámistsum búç jár gáarc ibí ké isé húk.

どれよりも猫が前を走っているところのその犬

という言い方はできます。なので^[71]比較基準項には差があります。

二つの連体修飾構造の接近可能範囲は、先ほど挙げたこの表の通りなのですが、非定型修飾構造は、この通りで、非定型修飾構造は、^[72]比較基準項を修飾することはできません。

ただ、^[73]非定型修飾構造には、^[74]関係化構造が表現することができない意味範囲をカバーすることがあります。それはどういうものかという、外の関係です。非定型修飾構造と外の関係です。

例えば例文 10 番。

détsiras gámiş. 「料理をする賃金」

あるいは例文 11 番。

tchúmo khár étas nás. 「魚を焼いている匂い」

のような表現が非定型修飾構造ではつくることができます。前提としていましたが、^[75]関係節は外の関係をつくることはできないので、これは非定型修飾構造にしかできない構造になっています。

なので^[76]接近可能範囲は、実は項ではなく、このように外関係を考えると非定型修飾構造をつくることができる。^[77]関係化構造は、構造的にあり得ないということになります。